埼玉大学経済学部同窓会

経和会会報

第 8 号
2005年5月10日発行
発 行　埼玉大学経済学部同窓会
経和会会長　内藤　勝久
編 集　常務理事　栗原　毅
さいたま市桜区下大久保２５５番地
ＴＥＬ　０４８－８５８－３２８１

経和会ホームページをご利用ください
※左下、記事をご覧下さい
URL http://www.keiwakai.net　ログイン名　会員パスワード

魅力ある経和会を目指して

経和会会長　内藤　勝久

会員の皆様におかれましては、ますますご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。平素は経和会のためにご支援ご協力を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

慌しい昨年の会長就任でしたが、総務、企画、広報３委員会の精力的な活動のお陰で、新生経和会のインフラも着々と整ってきました。ホームページのバージョンアップ、広報誌担当常務理事の任命、若手ＯＢ・ＯＧ交流会の発足、経済学部執行部との交流強化などいずれも経和会発展に不可欠のインフラです。

ホームページに掲載の「会長挨拶」で私は、活動の優先順位を⑴学生の就職支援⑵異業種・異文化との交流⑶経済学部支援⑷同窓会連合会支援とした上で、旧制浦高、埼玉師範の流れを汲む母校を、埼玉県民から信頼される大学にするため、経和会から立ち上がろうと訴えました。

幸い団塊の世代の「大定年時代」が始まり、スキル、人脈、感性に恵まれた多くのＯＢ・ＯＧの経和会活動への参加が可能となりました。また若手交流会にはＯＧが積極的に参加し、今まで気づかなかったさまざまな提言をいただいています。今後はＯＧにどんどん幹事をお願いし、女性会員の増員や世代の交代に繋げていきたいと思います。さらに経済学部との交流会では「ゼミ協」を復活させ、学生と経和会との親密な関係を構築することが決まりました。老若男女がそれぞれの持ち味を発揮し、協力し合っていけば、自ずと相乗効果が表れ、生き生きと学生が学ぶ、魅力のある経済学部が誕生すると確信しています。

ところで独立行政法人化後の埼玉大学では、新年度から「ＣＡＬＬ教育」と「テーマ教育プログラム」を目玉とする新たなカリキュラムがスタートいたしました。「ＣＡＬＬ教育」は新入生を対象とし、卒業までに全員が英語のＴＯＥＩＣ６００点を目標とするもので、全国でも初めての試みとして注目されています。また「テーマ教育プログラム」は「社会と出会う」をテーマに①仕事と出会う、②会社と出会う、③人と出会う・生活と出会う、④埼玉と出会う、⑤世界と出会う、⑥ＮＰＯと出会う、⑦スポーツ・マネジメント概論から構成され、卒業生も教壇に立ちさまざまな体験を学生に伝えることになっています。

しかしどのような大学を目指すのかまだ全体像はつかめず、したがって同窓会連合会の役割も判然としませんが、少子化時代の大学経営を軌道に乗せるためには、各界で活躍した、または活躍中の卒業生の力が特に必要であることは明白です。いつでも大学の要請に応えられるように、伊藤会長（前経和会会長、現在はご隠居）のもと①人材バンクの開設（各学部から20名ずつ計１００名の人材の登録）、②ホームページの開設、③事務局の活用を当面の課題として取り組んでいます。

埼玉大学の目指す山が決まれば、経和会はその先陣を切ってルートを切り開いていきたいと決意を新たにしています。

平成17年度・経和会総会のご案内

一　日　時
平成17年7月9日㈯
総会・講演会
13時（受付12時30分）
懇親会
15時30分～17時30分

二　場　所
埼玉大学下大久保キャンパス
さいたま市桜区
下大久保２５５
☎０４８（８５８）３２８１

三　講　演
「マス・メディアが、今問われているもの」
ネットとメディア、通信と放送の「融合」とジャーナリズム機能への影響
講　師　仲佐　秀雄
（元民放連事務局長、元山梨英和短大情報文化学科長、埼玉大学文理学部卒業）

四　懇親会会費
５、０００円
（経済学部学生・院生は無料）

五　交　通
ＪＲ京浜東北線「北浦和駅」
またはＪＲ埼京線
「南与野駅」下車
（いずれもバス埼玉大学行き）

六　出欠連絡
６月20日㈪まで
（同封ハガキにて）

経和会ホームページのお知らせ

経和会のホームページを刷新しましたのでご紹介いたします。

1．画面へのアクセス方法

URL
http://www.keiwakai.net

またはｙａｈｏｏなどの検索画面から「埼玉　経和会」で検索ください。

2．次のMenuがあります。

- 会長挨拶　・組織　・総会
- 経和会会報　・就職案内
- オープンセミナー
- 会員の広場　・ボランティア
- 各種問い合わせ
- リンク（大学などのＨＰとリンクしています）

3．会員の広場

卒業生の皆さんは会員の広場を是非活用して会員交流の場として連絡・情報交換などにご利用ください。

また記事・写真の投稿を期待しています。

- **クラス会・同期会**
- **写真の広場**
- **趣味・道楽**
- **ゼミ・サークル**
- **慶弔連絡**

などのジャンルに分かれています。また入力画面がありますのでどなたでも自由にご利用になれます。

昨年10月末のオープン以来2000件を超えるアクセス件数がありました。

平成16年度 経和会事業報告（H16/4～H17/3）

5月10日　経和会　会報第７号発行
7月10日　経和会理事懇談会　「経済学部会議室」（会長外12名出席）
7月10日　経和会　平成16年度総会及び懇親会（会長外120名出席）
（講演　経済学部第53期卒業　中村直行氏　「医療情報を有効に活用しましょう」）
7月10日　経和会クラブの場所変更
８月の第３水曜から経和会クラブを新たに銀座８丁目「美和」に開設した
毎月第３水曜日　18時30分～20時30分
銀座８丁目７番11号　ソワレド銀座第二弥生ビル地下
TEL　03-3572-6610
8月18日　経和会理事会　経和会クラブ　銀座「美和」（会長外15名出席）
9月６日　各委員会合同打合せ会　銀座「ニュートーキョー本店」（会長外９名出席）
10月20日　前伊藤会長記念品贈呈式　経和会クラブ銀座「美和」（会長外14名出席）
11月10日　広報委員会若手交流会　銀座「ブラッセリーライオン」（中村副会長外６名）
11月12日　経済学部　インターンシップ報告会（竹田副会長、専務理事外１名出席）
12月14日　経和会・経済学部交流会（会長、上井名誉会長外19名出席）
１月11日　広報委員会若手交流会　四谷「赤いキャベツ」（会長外14名出席）
３月25日　埼玉大学卒業式・経済学部卒業祝賀会
（会長、伊藤前会長、河野副会長、小池専務理事出席）

ますます盛んになるインターンシップ

経和会の皆様には、多方面の事業所等におきましてますますご活躍のこととお慶び申し上げます。

この度、『経和会会報』に経済学部が正規の科目として実施しているインターンシップ（「ビジネス実習」二単位）の教育活動の紹介を載せていただく機会をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

経和会には、毎年、学生のインターンシップ実施後の公開報告発表会において豊富な経験に基づくご指導ならびに、その実施のために経済的支援をいただいておりますことにまずもって、深く御礼を申し上げます。

一、インターンシップ制度の紹介

●インターンシップとは何か

インターンシップとは、学生が企業、NPOなどの事業所で就業体験を積む、いわゆる労作教育の一つです。学生は、この就業体験を通してこれまで勉学してきたこと等について検証し、かつ自らの職業に対する望ましい勤労観（自らの可能性・素質・適性・潜在性）を涵養することを目的にしています。

●インターンシップの歴史は古い

そもそもインターンシップは、米国の大学で百年前に考え出された仕組みです。自分が専攻する学問が社会でどのように生かされているかを職場で確かめ、勉学の励みにしようという試みで始まりました。

現在、米国では、大学と受け入れ側が共同で、授業の科目として認めるインターンシップ（コープ教育と呼ぶ）のプログラムを研究・開発し、学生が専攻する学問を職場で検証する仕組みが浸透しています（『日本経済新聞』二〇〇四・七・一七朝刊）。

●日本の大学でインターンシップをどれだけ実施しているか

二〇〇二年度中には、インターンシップ科目を導入した大学は、全国の三百十七大学（全体の四六・三％）で、約半数の大学でインターンシップを授業科目として位置づけています。

ちなみに、二〇〇二年中にインターンシップの単位を取得した学生は三万人を超えたといいます（文部科学省調べ）。これは、インターンシップが大学のカリキュラムとしてすっかり定着してきていることを表しています。

●本学部でインターンシップをはじめた背景について

本学部は、一九九九年度にインターンシップを始めました。当時の日本経済は一九九七年の金融不安が発生し、デフレ・スパイラル現象を呈していた時期で、企業は、過剰雇用・過剰債務・過剰設備の克服のためのドラステックなリストラクチャリングの真只中にあり、一層のグローバル競争と経済のソフト化への産業構造転換の時代でした。

こうした日本経済の状況ですから、学生の就職環境は最悪で、超氷河期といわれるほどの就職難の時代でありました。

その一方で、就職した新卒者の三割の人が三年以内に会社を辞めてしまうという時代でもありました。豊かな社会で育った多くの学生は、自分の好きなことをしたいとの願望が強く、職業選択（仕事）においても学生の自己実現欲求が年々強まってきていた時代でもあり、現在も一層この傾向は続いているように見えます。

こうした時代背景の中で、学校で学んだこと、これまで培ってきた技能・能力を実際の会社等事業所で確かめ、学生自らの将来の進路、能力開発に生かしてもらいたいとの思いで、当時埼玉大学経済学部教授であった菊池英雄氏（現在、西武文理大学教授）を中心にして一から手探りでインターンシップを始めました。

●一九九九年度にインターンシップ開始

本経済学部のインターンシップは、一九九九年度からで、「特殊講義・ビジネス実習二単位」科目としてスタートし、二〇〇四年度で七回目を実施しました。

最初の年度には、まず受け入れ先企業探しから始まり、学生の行きたい業種、希望の仕事等をヒアリングし、企業と学生のマッチング作業に多くのエネルギーと時間を費やしました。受け入れ企業については、幸い、菊池教授に縁の深い企業を中心に、関東経済産業局の広域インターンシップに参加し、情報関連企業を中心に、六企業で九名の学生に就業体験を実施することができました。

スタート時のインターンシップ実行委員会は、実行委員長の菊池英雄教授と箕輪徳二、江口幸治の両委員で運営されました。

●本学部のインターンシップ制度の概要

本経済学部のインターンシップ制度は、「埼玉大学経済学部インターンシップ指導要領」（以下「指導要領」と略）に基づいて実施されているので、簡単に主だった項目を紹介いたします。

①実施期間

夏季休業期間（八月から九月）内で、二週間（実質十日）を実習期間とする（「指導要領、三」）。

②事前研修、実習先の事前訪問

学生は、「事前研修」に参加し、実習の心構え等の講習を受けなければならない。必要に応じて、インターンシップ受け入れ先に事前訪問するなどして、実施日程、プログラムの調整などを行うこととする（「指導要領、五」）。

③災害などの保険加入の義務付け

学生は、インターンシップ参加期間中の災害などの事故に備えるために、「教育研修災害保険」および「インターンシップ・介護体験活動・教育実習等賠償保険」に加入しなければならない（「指導要領、六」）。

④プログラムにかかる費用等について

派遣条件は実習先との話し合いで決定するが、教育重視の観点から、原則として給与・手当などの支給は行わない。ただし、通勤費および実習期間中の研修費・交通費など実習のために必要な費用はこの限りでない（「指導要領、七」）。

⑤作業日誌の作成

学生は、参加期間中、所定の「作業日誌」を作成し、実習先の上司の署名捺印を受け、実習終了後に、それを「インターンシップ参加報告書」とともに、経済学部学務係に提出しなければならない（「指導要領、十」）。

⑥事後研修および参加発表会

実習終了後、「事後研修会」（個別面談等）に参加するとともに、実習先の関係者を招き、広く公開して「インターンシップ参加者報告会」において実習成果等の報告をしなければならない（「指導要領、十一」）。

⑦単位の認定

単位の認定は、二単位とし、インターンシップ実行委員会による、受講生との個別面談にて行うものとする（「指導要領、十二」）。

二、インターンシップを実施して

●インターンシップ実施後の感想から

①受け入れ先事業所の皆様からの感想

受け入れ先の事業所の皆様のアンケートから、実施後の感想を、いくつか紹介します。

「実施の際には、受け入れ現場と学生のお互いのニーズを知り、カリキュラムの作成、業務内容やスケジュールを調整するのに苦労はあったが、教えることは教わること、若い人たちの職業観を再認識できたこと、社内の活性化などに役立った」

「インターンシップの受け入れは初めてでしたが、次の二点で有意義でした。それは、学生さんに小売業の意義、楽しさを理解していただくことの重要性と採用活動プロセスにおいて、学生さんたちの就職マインドを向上させる行為の重要性という点であります」

「参加した学生さんから、非常に好印象を持っていただいたことはうれしいことであった」

「インターンシップ実施前と後では、顔つきがしまってきて、充実感が漂っていた」

「学生のビジネスに対する姿勢が評価できる」などであります。

受け入れ先の担当者の皆様には、大変ご苦労をかけてきていますが、好意的に学生を指導していただいている様子を窺うことができ、将来の社会を担う人材育成を担っていただいておりますことに感謝申し上げる次第です。

②実習学生の体験談・感想

参加した学生からの体験談・感想をいくつか紹介します。

税務会計事務所でインターンシップを終えた、Aさんは「インターンシップに参加してよかったことは、巡回監査に同行させてもらいさまざまな企業を見ることができ、そこでの社長さんのお話を伺ったことです。企業はどのように動いているか、社長はどのような考えで事業を行っているかなど、普段疑問に思っていたことなど実際見たり聞いたりしたことはとても貴重な経験になりました」。

Bさんは「十日間のインターンシップはあっという間に終わった感じです。挨拶などの基本的なことでもアルバイトとは異なり、緊張感がありました。挨拶一つ一つや関与先の方との何気ない話の中には、税理士という専門職としての知識を深めていく努力と同時に関与先との信頼関係がなければ正しい監査ができないことを知り、人と人とのコミュニケーションが非常に重要であることを痛感しました。また大学の講義とは異なる実務の簿記、会計を体験でき、自分自身の勉強がまだ足りないことを痛感し、これから改めて勉強していかなければならないという気持ちになれたので非常によいきっかけになった」。

法律事務所でインターンシップを終えた、Cさんは「参加してよかったことは、法律事務所での雰囲気を味わえたこと、弁護士の先生や事務所の方が、裁判、依頼者からの相談、裁判のための準備等一日どのような仕事をしているのかなんとなく理解できたこと、さまざまな興味あるお話を聞けたこと、そうした中から自分に何が足りないかがわかったことです。事務所でのスタッフの仕事振りを見て、今の自分ではこの仕事を消化できないと思いました。事務所のスタッフと自分のとの差を考えると、自分に何が足りないのかがわかったような気がします。また、さまざまなお話を聞くことで、それぞれの人の考え方や見方、仕事の大変さがわかりました」。そして、Cさんは「今回のインターンシップで自分に足りないところを勉強し、直すところは直すよう努力していきたいです。……事務所では明るく人柄がいい方が働いていて、雰囲気がよく、研修がやりやすい環境でした。能力を身につけるだけでなく、人とのコミュニケーションがうまくとれないと、仕事上大変であることに気づきました。私は、言葉にして表現するのが苦手なのですが、その点でも、克服するよう努力していきたいです」。

製造業でインターンシップを終えた、Dさんは、「……学んだことは、働く、ということは与えられた仕事をこなすだけでなく、求められているのは、そこでの問題点を発見したり、改善策を出したりするプラスアルファ的な部分だと感じました。働かされているのではなく、自分ができることはなんだろうと、常に意識することが大切だと思います。また、今回私が参加した目的である、メーカーとはどのようなことをやっているのか、中小企業で働くとはどのような様子なのか、ということについてほんの少しですが理解できたと思っています。」そして、Dさんは、「このインターンシップに参加して、自分が進みたい道が明確になりました。……働くことの基本的な心得を学べたと思います。二週間という短い期間だったので、働く際の常識についてはまだまだ未熟であると思います。しかし、この経験からその一部は学習できたと思います。これからの就職活動に向けて、本当に貴重な経験をさせていただきました」。

●実習とその後の成果

インターンシップに参加した学生は、その職場体験から、これまでの学校教育では得られない貴重な体験をしてきており、体験後の勉学の取り組み姿勢、自分の将来の進路を考える糧となっています。参加学生の多くが、その職場体験を通して、仕事への厳しさ、責任感、仕事に対しての積極的な問題解決能力の必要性、お客さんや職場の同僚との良好なコミュニケーション能力の重要性とそのための言語、文章等による表現能力の重要性等を体得してきています。

三、インターンシップ実習状況と経和会会員へのお願い

●充実発展するインターンシップ

一年目である一九九九年度は、六事業所で九名が就業体験をしました。

二年目の二〇〇〇年度には、新たに埼玉県庁のほか、大手食品スーパーなど地元有力企業にも受け入れ先になっていただき、一〇事業所で二六名の学生が体験学習をすることができた。

三年目（二〇〇一年度）には、特定非営利活動法人（NPO）ヒマラヤ保全協会、財団法人児童育成協会などが新たに加わり十四事業所、二七名の学生がインターンシップを体験しました。

四年目（二〇〇二年度）は、新たに長野県八千穂村にある有機農家・織座農園が加わり十一事業所で一九名の学生が実習を受けました。

五年目（二〇〇三年度）には、新たに文部科学省、群馬県庁、法律事務所、市役所などに受け入れていただき、十九事業所で四四名の学生が実習をすることができました。

六年目（二〇〇四年度）には、NPOのハートフルみやしろ、所沢市学童クラブの会などに受け入れていただき二十二事業所で四十六名の実習をすることができました。

以上のように、年々学生の参加者が増大しており、それを多方面の事業所で受け入れていただいてきています。

しかし、二〇〇四年度は八一名ものインターンシップ参加希望者がおりましたが、委員会で用意した受入先などに、学生が希望する職種がないなどの理由から、途中で辞退したものが多く出たしまったことは、委員会として、今後の重要な課題となりました。

●経和会会員へのお願い

お蔭様で、年々インターンシップを希望する学生、受け入れ先事業所も増加してきております。しかし、学生が希望する職種に派遣させてあげるためには、まだまだ受け入れ先事業所が不足しています。

そこで、是非、後輩を受け入れて就業体験させてもよい、または、相談に乗ってもよいという組織などがありましたら経済学部の学務第二係までご一報をお願い申し上げます。

埼玉大学経済学部
インターンシップ実行委員会
箕輪徳二（文責）、江口幸治、三宅雄彦

インターンシップの参加者推移

業種＼年度	1999	2000	2001	2002	2003	2004	合計
埼玉県庁		10	4	7	11	3	35
群馬県庁					1		1
文部科学省					1		1
市役所					1	1	2
情報関連会社	8	8	11	6	6	5	44
会計事務所		1	1	2	3	3	10
法律事務所					2	3	5
製造会社	1	1	3	1	3	3	12
NPO法人			1			7	8
財団法人			1				1
スーパーマーケット		2	1				3
有機農家				1	10	9	20
マスコミ関連会社		2	3	2	3	3	13
保険会社		2					2
不動産会社			1			6	7
旅行会社			1				1
調査会社					2	1	3
ホテル・サービス会社					1	2	3
合計	9	26	27	19	44	46	171

社会人教育がスタート

特任教授・就職相談　今　野　耕　作（昭和38年卒）

　今、埼玉大学が大きく変わろうとしています。その一つが、産学協同による産業人づくりです。この仕事で内藤勝久、今野耕作の二人が、あれこれ試行錯誤し、頑張っています。幸い、経和会をまとめる内藤会長と、産業人の能力開発の実務を手がけてきた私の組み合わせが良く、ＯＢの方々のご協力もいただいて、予想以上の成果を上げ大学側にも喜んでもらっています。

　昨年まで二人の仕事は、就職支援一本に絞ったものでしたが、今年から新入生の一般教養講座も担当することになりました。「社会と出会う」というテーマ教育で、私たちが担当するのは、「会社に出う」という実践講座です。

　会社の実像、組織運営のルール、会社が目指しているもの、事業活動の楽しさ、21世紀の会社の役割、求められる人材、ビジネスマナーなどを、ワークショップを取り入れ、身につけてもらう講座です。

　講座の中では、ＯＢの方を中心に実業界で活躍されている方々のレポートも取り入れて行きますので、今後ともご協力の程よろしくお願い申し上げます。

　私達が担当するクラスは最大４百名。大学では初めての新しい実験ですが、先生方と二人三脚で21世紀型の大学を目指します。

　新しい時代の大学は、学生にとって夢と方向性のある中身でなければ見捨てられてしまいます。テーマ教育を担当する私達の仲間の先生方は、皆燃えています。また中間報告をいたします。ご支援ご協力よろしくお願いします。

薄井ゼミの活動を語る

経済学部経営学科　岡　田　大　地

　「日本的消費文化」には、どのような事例があるか。このテーマが、ゼミ選考時の課題レポートであった。

　この課題を端に発し、薄井ゼミでは、現代消費社会と消費文化を形成するマーケティングの役割との関係性を考察することを主として勉強してきた。ミクロ的・個別的な企業戦略論の観点から、ブランド論や流通戦略論を学ぶことも重要だろう。しかし、薄井ゼミでは、ミクロな消費の背景にある壮大な文化体系を紐解くことで、現代社会の諸問題を議論し、また「日本的消費文化」の概念を学ぶことができたのである。

　例えば、近年経済界から着目される反面、社会問題としても取り上げられる、高級ファッションブランドの消費文化は、非常に面白い事例であった。10代後半や20代の女性を中心とした若年層が、こぞってルイ・ヴィトンやグッチ、クリスチャン・ディオール、シャネルといった高級ファッションブランドを多く購入している事実は、周知のことである。ルイ・ヴィトンの日本法人は国内の売上だけで、世界における売上高の４割以上を占める。

　薄井先生は、この現象が個々の企業戦略による直接的な結果ではなく、マーケティング戦略の合成された結果として、日々の購買行動や消費行動の規則に基づいて形作られていく、と指摘している。

　この他にも、規格化されたサービスを好む「マクドナルド化された消費文化」や「ポストモダンの消費文化」など、非常に興味深い課題に取り組むことが出来た。私は、これらの課題の中からブランドについて強く心を引かれ、卒業論文のテーマに決めたのである。

　今日のゼミ活動の進行にしても、活発な発言が飛び交い、年の上下に関わりなく忌憚のない指摘も多々ある。時に議論が紛糾し収拾がつかなくなったときは、薄井先生が絶妙な采配でその場を収める。ゼミでは、ブランド論や流通論、社会現象から見るマーケティングの事例を考察し、活発な意見交換ができるような雰囲気が醸成されている。むしろ、発言をしないと気が済まないとさえ感じている者も少なくないのではないか。

　薄井ゼミは、一言で言い表せば思考力と主体性を培うことのできるゼミである。勿論、受身の姿勢では得るものは多くない。しかし自ら考え、行動に移すことで視野の広い思考で、自主性をもった活動が行えるのである。今日の企業では、即戦力が求められ、コミュニケーション能力の高い人材が重宝されている。このための即効薬はないが、これらの礎を在学中に育むことができる場があるとするならば、それはゼミなのではないだろうか。

　２年半という長いようで短いゼミ活動であったが、薄井先生には感謝に堪えない。厚くお礼を申し上げたいと、切に思うのである。

若手の参加拡大が求められる同窓会活動

●経和会広報委員会新年若手交流会報告

交流会幹事長　舘　逸志（昭和56年卒）

　四谷三丁目には、古くからの飲食店が軒を連ねる一角がある。

　平成17年１月11日の夕刻、経和会の老若男女17名がその中の一軒のスナックに集まった。

　若い女学生数人は、中高年のサラリーマンに挟まれて、緊張の模様であった。

　まず、40代後半と思われる実にエネルギッシュな感じの男性により、会合の趣旨説明が行われる。次に、会合の主賓と思しき、品の良いロマンスグレーの紳士から話が始まる。穏やかな話しぶりの挨拶の後に、次々と出席者からの自己紹介が続いた。若い女学生達は、先輩達の視線が一斉に注がれる中での挨拶に、余り言葉が繋がらない様子である。

　挨拶が一巡し、乾杯が済んで、やっとテーブルの上のオードブルとビールのグラスに手が伸びはじめる。そして、あちらこちらで先輩、後輩の会話が始まった。

　６時半に小さなスナックで緊張感と戸惑いの中で始まった会合は、３時間後、黄色い歌声が木霊する賑やかな宴会へと変わっていった。帰りの電車の時間が気になる女学生は、一人、二人と抜け、最後に終電を諦めて残った社会人メンバー６人は、大変和気藹々と楽しいものとなった会合の余韻を楽しみながら、再会を約した。

◆　◆　◆

　経和会中村広報委員長の発案で開かれた経和会広報委員会新年若手交流会の様子を描写すれば、このようになろうか。新年会には、内藤経和会会長、中村広報委員長の他、昭和53年～58年までの卒業生、平成16年新卒の社会人１年生、経済学部江口先生と在学生（今後の就職活動を控える２、３年生）総勢17人が集まった。参加卒業生は金融、マスコミ、会計事務所、教員、公務員であったが、在学生からは仕事内容、就職活動上のアドバイスを先輩に聞く真剣な質問が浴びせられていた。在学生は、自分が何をしたいのか、どんなキャリアパスが考えられるのか、職場の先輩訪問はどのようにしたらいいのか、就職活動を有利に進めるにはどうしたら良いのか、など就職上の悩みは尽きないようである。短い時間ではあったが、食事を共にし、ビールを注ぎ合いながら、ざっくばらんにそのような質問を様々な職種の先輩に投げかけられたのは、今回の会合の大きな意義であったと言えよう。卒業生にとっても、久しぶりに在学生の話を聞いて、懐かしく学生時代を思い出したことだろう。少なくとも、今回集まった卒業生は、後輩が就職のための情報収集で訪ねて行けば、時間の許す限り対応してくれるだろう。また、本人が学生の直接の志望先企業にいなくても、知り合いの同窓を紹介するなど何らかの役に立つことができるであろう。現役学生にとっても、卒業生はそういう気持ちでいるということを確認できたことで、今後、もっと気軽に先輩訪問を行えるようになるのではなかろうか。

　このような経和会の若手交流会が開かれたきっかけは、昨年８月中村広報委員長に誘われて、テレビ埼玉平本東京支社長（昭和53年卒）と私の３人で集まった会食であった。その場で、中村委員長から、経和会の活動を今後一層活性化するためには、若手の参加が必須であり、そのための場を作れないかと問題提起が行われた。全くの偶然であったが、私の所属する内閣府には平成16年度に埼玉大学の新卒２名が採用されるという奇跡が起こっていた。内閣府本府の新人採用は全体で40名程度に過ぎず、同窓生の入府はこれまで平均10年に一人程度であった。今年は、同時に二人、しかも私がいる内閣府本府４階の同じフロアで勤務することとなったのである。こんな偶然があるものであろうか。しかも、私が後輩の入府に偶々気がついて二人を昼食に誘った直後に、同じレストランで中村委員長の話を聞くとは、これこそ天の啓示というものであろう。私は、その場でこの奇跡をお二人にお話しするとともに、早速若手交流会の幹事長をお引き受けした次第である。

　忙しい皆さんの日程を調整して、第１回経和会広報委員会若手交流会が実現したのは、11月11日のことであった。集まったのは、新年会にも集まった経和会中堅メンバーの面々と新人の計７名であった。中堅メンバーの驚きは、内閣府２名同時入府の奇遇ばかりではなかった。何とその新人２名が見目麗しき乙女であったことである。昭和50年代卒業メンバーにとって、経済学部は大半が男子学生という先入観があった。これが見事に覆されたのである。（なお、新人の内１名は経済学部、今１名は教養学部である。）この第１回若手交流会が大変盛り上がったことは言うまでも無い。しかも、会合では、若手メンバーから経和会の決定的な問題点が指摘された。

　彼女達によれば、過日私に昼食に誘われるまで、二人は埼玉大学の同窓会活動を知らなかったというのである。一人は、経済学部卒であるが、会報も見たことが無かった。また、現在の埼玉大学の若手卒業生の中では、仲の良い友人同士で会うことはあっても、学年の中で広がりをもった同窓会活動は皆無、大学からも経和会に関して何の情報も無い、入っていることのメリットを感じない等、それなりに同窓会活動に参加してきた積りの中堅メンバーにとっては大変ショックな感想であった。

　しかし、意見は、単なる経和会批判ではなかった。早速、対応方策についても話題になり、ゼミやクラブの同窓会活動の活発化、その場での経和会の紹介、各年次に既にある同窓活動を掌握し、その幹事など核となる人物を年次別幹事に任命していくことなど現実的な改善策が提案された。特に、同窓会活動を魅力的なものにしていくためには、女性幹事を任命していくことが効果的との中堅男性卒業生衆目一致の提案もあった。

　さらに、話は厳しい就職活動状況に集まった。学生にとって、大学は学び舎であるとともに、将来のキャリアパスの出発点である。大学がどの程度就職活動を支援してくれるかは、その存在価値そのものに関わる。新卒二人の実体験では、埼玉大学は就職支援に関して、実に不親切であったという感想であった。二人は公務員志望だったので、企業志望者と異なるところはあろうが、大学からの先輩紹介は一切無かったということであった。これは、就職支援活動に力を入れようとしている経和会としても、肝に銘じなければならない現実であろう。今後、就職支援活動を活発化すると同時に、学生の間に活動を周知していくことが重要と言えよう。

　さて、このように大変盛り上がった広報委員会若手交流会では、長く大学を離れていた卒業生にとっては、目から鱗の発見も多く、こうした交流会の頻繁な開催が重要との具体的な結論を得た。早速、中村委員長から若手交流会忘年会をより拡大した形で開催すべしとの厳命を頂いて、準備していたところ、在学生も交えた新年会として開催してはどうかとなった次第である。

　今回は、江口先生と中村委員長のご相談の結果、現在、最も厳しい就職環境に置かれている女子学生を対象に、試行的に卒業生との懇談を行った。しかし、今後は、対象を広げて、関心のある在学生に情報が開かれた会合にしていければ、もっと効果的であろう。次回以降の会合の実行委員長に任命された野口理事（昭和56年）の活躍を期待したい。

　内藤会長からは、経和会として在学生の希望により的確に応じることができるように、多様な業種の中堅クラスで頑張っている卒業生で、企業先輩訪問の窓口になってくれる者50名程度のリストアップが提起されている。新年会参加卒業生を始め、是非、多くの経和会メンバーの協力を得て、就職希望学生の相談に親身になってあげられるようなネットワークを築いていきたいものである。そして、来年の新卒学生が集まったときには、本当に埼大に進学していて良かった、経和会のメンバーで良かったと言ってもらえる同窓会活動にしたいものである。若手交流会の活動などを始めとして、微力であるが、多少ともお役に立てれば幸いである。

わが青春の蒼玄寮

昭和36年卒　金井　章夫

蒼玄寮に入寮したのは昭和三十二年の四月、そして昭和三十六年三月卒業のときまで、丸々四年間寮生活を楽しみました。さまざまな思い出が断片的に蘇って来ますが、何分半世紀近くも経っていますので、曖昧なところが多く戸惑うばかりです。また、同じ時期に寮生活を送った仲間たち（岩井氏、谷中氏、栗原氏）が既に寄稿されているので、重複したことばかりになってしまいそうですが、予めご了解をいただきたいと思います。

最も印象深いのは、食生活のことです。当時、一日三食七十円という値段は、貧乏学生にとっては真にありがたく生活の目処もつけられ、貴重なものでした。しかし戦後十数年たち、世の中も落ちつき、物価も上昇傾向に移りつつありました。寮の運営はすべて学生の自治に委ねられていましたから、食事に関わる経費もすべて私達の裁量に任されていたわけです。確か二年生のとき、寺井さん、五十嵐さんと寮自治会の三役を仰せつかり、七十円のままでは破綻してしまうと判断し、十円値上げして三食八十円にしたい、と寮生大会に提案しました。夜中まで数時間に亘って議論が続き最終的に採決されましたが、僅差で否決されていました。その頃の学生生活がいかにシビアであったか、をあらためて思い起しています。

その頃、関東甲信越ブロックの国立大学の学生寮自治会連合なるものに参画したことも懐かしい思い出の一つです。関東地区の各大学の学生寮を訪問し、お互に抱えている問題などを話し合ったり、交流を深めたりしたものです。当初は寮生活、自治の問題を中心に据えて活動していましたが、外部環境の変化、考え方の多様化が進み、活動のテーマが変質しはじめ、共通の基盤を失なっていったため、活動そのものが消滅してしまった、ときいています。

寮生活ではさまざまな思い出がありますが、何と言っても生活費の確保が最も大切な課題で実にいろいろなアルバイトをしました。学生生活の後半（三年～四年生）には、家庭教師を二つ、そして奨学金の増額もあって安定した生活ができましたが、一～二年生の頃は、先輩や同級生から話があると、なんでもとびついてやりました。その中でも特に忘れ記憶らないアルバイトについてかがします。

一つは、浦和競馬場の「スアボード（？）」内でのバイトです。当時はすべて手作業でしたから、速く正確に情報を伝える役割で大変緊張したことを覚えています。着順、配当などが部から電話で連絡が入り迅速に表示板をかけ皆で一斉に掲示しますと、ドーっと観衆のどよめきが沸きあがります。生まれはじめて競馬場に入った訳でしたから、おどろきの連続でしたレースは三十分間隔でしたので、待機時間には、某先輩が持参した「？」付きの雑誌や本を読んでいたり、特別講義を受けたり、学校では学べない「学問」を吸収したものです。

もう一つは、後楽園（今の東京ドーム）での売り子のバイトです。これは実益よりもむしろ野球観戦の楽しみの方が大きいバイトでした。バイト代は歩合制でしたから、自分で売上げ目標を決め、ゲームのはじまるまでに何とか目標が達成できるよう大声を出して歩きまわりました。でもはじめの数日は「あんパン」だけですから未達のままでした。その後、キャラメル、せんべいなど商品が多くなりましたので、早めに目標をクリアし、ゲーム観戦に集中できるようになりました。

さて話はかわりますが、先輩の定村さんが主宰されていた「しあわせ会」というサークルのメンバーの一員としてさまざまな催しに参加できたのも楽しい思い出です。メンバーは本当に多士済済でした。あの頃教えてもらい皆でうたった数々の曲は私にとって貴重な財産になっています。十年程前から地元の混声合唱団に仲間入りし、定期的にレッスンを受け、地域の合唱祭などのステージに立てるのも、当時の蓄積のたまものと感謝しています。私にとって学生時代の唯一のサークル活動だったわけです。

ところで、学生の本分である学業について振りかえってみますと、どうもまともな学生ではなかった、と今でも反省しきりです。

寮に同級生がたしか十五名位いたのですが、それぞれ専門分野のオーソリティがいて、期末試験が近づくと臨時教授に就任し、できの悪い学生たちに深夜まで親切に講義してくれました。おかげで一人の落伍者もなくパスすることができました。ふだんの講義への出席率は、一部の仲間を除いて、おしなべて低かったと記憶しています。それもバイトだけが理由ではなく、学生寮のもつ独特の雰囲気の中で、惰眠を貪るようなこともあったと思います。

最後になりましたが、やはり寮生にとって最も楽しくやりがいのあったのは、寮祭ではなかったかと思います。昭和三十四年の寮祭には実行委員長に推され、山脇さんと二人三脚で企画段階からすべてが終るまで精一ぱい頑張ってやりました。勿論大勢の実行委員の皆さんのバックアップがあったからこそすばらしい寮祭ができたものと今も信じています。

その時の寮祭で、実行委員の中に新入学生でとても明るいすてきなお嬢さんがいました。何となく心惹かれていろいろお話したことを覚えています。その後はキューピッドに導かれるままに四十数年経ってしまいました。寮祭のとりもつ縁で生涯にめぐりあうことができたこと当にありがたく思っています。が個人的なことで終ってしまったとを本が、まさに青春まっ只中の四年間を、蒼玄寮で、すばらしい仲間たちと暮らすことができたことを最高のかけがえのない宝として、これからも大切にしていきたいと思います。

諸兄姉の益々のご健勝を祈念して筆を擱きます。

蒼玄寮にて（中央筆者）　昭和35年

寮祭実行委員・山脇氏と　昭和34年

同級会交流録

昭和39年卒同窓会三九会幹事　増田　巌

昭和39年といえば、東京オリンピックの開催年であり、東海道新幹線が開業し、自動車専用高速道路の建説が本格化した年ですが、それからすでに41年が経ち、われわれの同窓生は定年をむかえ、それまでの仕事の第一線から退きました。その後については、それまでの豊富な経験と大きな包容力により、それぞれが新しい環境の下で活躍しております。中には、それまでの仕事とはまったく違った趣味の世界で個性を発揮している者もいます。

私たちはこれまでに三九会と銘打って５回の同窓会をもちましたが、一番最近では2002年の経和会総会の後で、浦和の有名なうなぎ屋、山崎屋で開催しました。このときは30名ほどが集まり盛大に行われました。卒業してから始めて顔を合わす者もいて、最初の１時間あまりは近況報告ということで過ごし、その後思い思いに座談の輪をつくって２時間ほどの時間はあっという間に過ぎてしまいました。それからすでに３年を経過しようとしていますので、今年は久し振りに三九会を開催しようと思っています。

これまでは場所や時間の制約があり、仕事の都合で欠席という通知も少なからずありましたが、今回は、ある程度時間的余裕もあるのではないかと考え、夏のころに浦和のどこかに会場を設定したいと考えています。同窓生の多くは卒業してから浦和方面に足を伸ばす機会は少なかったと思いますが、青春真っ只中の４年間を過ごしたこの街には、その姿形がどんなに変ったとしても、心のどこかに抱いている懐かしい風景を見つけるに違いありません。また、全体の同窓会とは別に、時間のとれる人が定期的に集まれるような環境をつくることも企画しています。場所は未定で、どんな形式にするかもまだ固まっていません。どんな形式にせよ２、３ヶ月に一度ぐらいのペースで互いに刺激を受け合うことが必要ではないかと思っています。

以上のように、私たちの39年卒もとりわけ違ったことをしているわけではありませんが、むしろこれからどのような交友を保てるかが大きな課題ではないかと思っています。

埼大写真館

今回は新旧正門の写真を掲載します

古い懐しい写真をお持ちの方は事務局までご連絡下さい

平成17年　大久保

昭和34年　北浦和

編集後記

今回は、次の二つのことを念頭に入れ、会報誌を発行しました。

(1) 経和会が学生の**就職支援**並びに**経済学部支援**を行うこと。

(2) 現役の**教官・学生・卒業生**等若い方から年輩の方にも**ご寄稿**いただき、経和会は一部の古い卒業生だけのものという観念を打破し、若い方を含め多くの会員が強い関心を持って、経和会の発展に寄与すること。

最後に、**終身会費**（二万円）についてお願いします。会費は経和会の諸活動に充当しておりますが、残念ながら**未納の会員**が多くいます。会費未納の方は、趣旨をご理解の上、よろしくご協力の程お願いします。